

## 社会科学総合図書館の提案

村松 岐 夫

「人が建物をつくる。然る後は、建物が人をつくる。」(W・チャーチル) 私の提案は、まず干坪ほどの土地の確保とそこに七階建の建物をつくることから始まる。この建物には社会科学系の全学科に関係する資料(統計、調査報告など)・書物・雑誌が保管される。この図書館の位置は地理的に大学の中心にあるのがよい。二階から六階の間は、政治学が二階、社会学が三階、というように図書分類に応じた書物の収蔵がなされるであろう。一階には、各専門分野の講義と平行して学部学生が勉強すべき基本図書が毎学年教師により選択されて収蔵される。一階の書物は館外貸出の対象とはならず、場合によっては館内閲覧の時間さえ制限されるかもしれない。一定の書物は学生の利用率が高いことが予測されるし、他方書物の重複購入には予算からくる限度があるからである。七階は非常にたくさんの小部屋に分れていて、主として研究者・大学院学生の研究会その他に利用される。しかし、各専門内の研究会であれば従来の学部の建物があるわけだからそれを利用してもらうことにして、この七階の小部屋群は複数の専門にまたがる研究組織のために利用されるべきである。都市問題・国際関係・労働問題等の研究班が学内に組織されるとすれば、小部屋はそれらのための恰好の活動の場となるにちがいない。研究に必要な文献は階下から短時間でとり出されるであろう。一階から七階をつなぐのはエレベーターであって、人と書物の移動の円滑化が行なわれる。

現代の社会科学は、自然科学同様に次第に細分化されている。それは科学の進歩に伴う必然の結果ではあるが、しばしば、各専門の研究者の全体としての社会像を見失わせるという望ましくない結果ももたらしてきた。そこで、学問の総合という問題意識が各分野で成長しはじめているが、総合大学と自称する京都大学においてさえ、各分野からの研究者を新しく組織化し、学問の総合化を実現するための障害が非常に多いように思われる。学部自治の過度の主張とか講座制といった数十年前の研究教育体制が温存されているという根本問題もある。しかし、そうした制度的な問題に触れないとしても、必要な書物が地理的に分散していること、図書の利用方式が各学部毎に異なっていること等の技術的な問題が意外に大きな障害なのである。冒頭にW・チャーチルの言葉を引用したのは、物理的環境が人間の精神構造に強い影響を与えるという彼の一般論はこの大学社会にもあてはまるように思われたからである。もちろん、実はこうした七階建の社会科学総合図書館をつくるということ自体に障害となる要因が強固に存在していそうだとすることが問題であるのだが。(法学部助教授)